

V 地域支援センター「サポートJOYO」目次

1 「サポートJOYO」の開設

- (1) はじめに
- (2) 地域支援センターの位置づけ・組織表を含む
- (3) 相談・支援活動の実施状況・2年間の活動実績集計から
H19・20年度の比較と累計と所見
 - ア 年度別・月別相談件数
 - イ 平成20年度実施状況
 - (ア) 新規相談希望者と継続相談希望者の内訳
 - (イ) 主たる新規相談の内容
 - (ウ) 相談対象者内訳
 - (エ) 市町村別相談件数
- (4) 本校に寄せられた相談・支援依頼の傾向

2 相談・支援の具体的事例

(1) 相談支援

- ア 巡回相談・来校相談等の事例
 - (ア) 発達障害 (小学校) 「巡回相談員の活用」
 - (イ) 行動面不応 (中学校) 「研修協力も含めた支援」
 - (ウ) 不登校 「母親への相談支援」
- イ その他の相談支援

(2) 研修支援

- ア 研修会の開催
 - (ア) 「特別支援教育研修会」
 - (イ) 「事例支援研修会」
 - (ウ) 参加者の感想から
- イ 講師派遣、研修協力

(3) 他機関との連携

- (4) 情報発信
 - ア ホームページ
 - イ 便り、リーフレット
 - ウ 重心教育部紹介ビデオ (重心教育部の実践)

3 今後の方向性～広域な地域と連携した「サポートJOYO」へ～

- (1) 2年間の成果と課題
- (2) 今後の具体的な方向性

*資料 1 組織図

2 サポートJOYOたより (1、3、5)号

3 パンフレット

V 地域支援センター「サポートJOYO」

開設2年の歩みから

～城陽養護学校に求められる地域からの教育的ニーズに応じて～

本校の地域支援・連携のあり方とこれからの方向性

1 「サポートJOYO」の開設

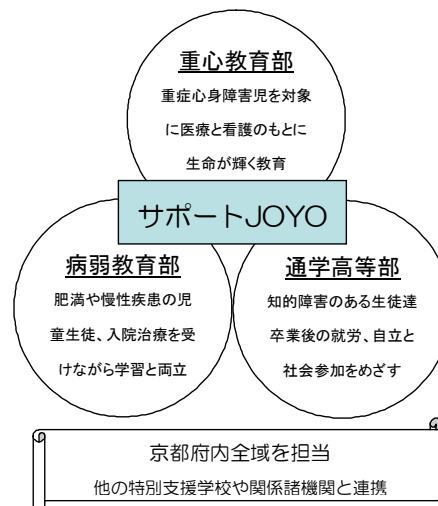
(1) はじめに

京都府立城陽養護学校では、平成19年4月より、地域支援センターとして、地域支援センター「サポートJOYO」を開設した。

3つの教育部からなる本校の教育の特徴や実践、隣接する国立病院機構南京都を始めとする医療機関との日常的なつながり、そして、山城地方を中心とした府内全域や他府県にも及ぶ広い地域との関わりを生かして、地域からの教育的ニーズに応じた支援や連携を行っている。

開設以来2年間で、地域から寄せられた相談は、知的障害や発達障害のある子ども達の学習や進路に関わる相談、心身の病気や不登校・不適応に関わる相談など、約140ケース、370件余り（平成20年12月現在）にのぼっている。地域における特別支援教育への関心の高さや、本校への期待の大きさとともに、地域支援センターとしての責任の重さを感じるところである。

今後も、障害のある子ども達の自立と社会参加を目指し、本校の専門性を生かした地域支援の取組を進め、広域な支援のネットワークにも参画するなど、地域・学校・関係機関との連携を具体化していきたい。



(2) 地域支援センターの位置づけ・資料「サポートJOYO」組織図 参照

平成19年度、学校教育法等の改正・施行による特別支援教育の本格的実施により、本校も特別支援学校として、地域のセンター的役割を担い、その使命として、地域からの教育的ニーズに応じた支援に本格的に取り組んでいくこととなった。全校教職員の共通理解と3教育部の連携協力を基に、校務部会として「地域支援部」を組織した。それまでの在校生への相談支援を中心に進めていた「教育相談部」の業務に加え、校外・地域への支援や連携の積極的な推進を任務とし、ここに地域支援センター「サポートJOYO」は開設されることとなった。

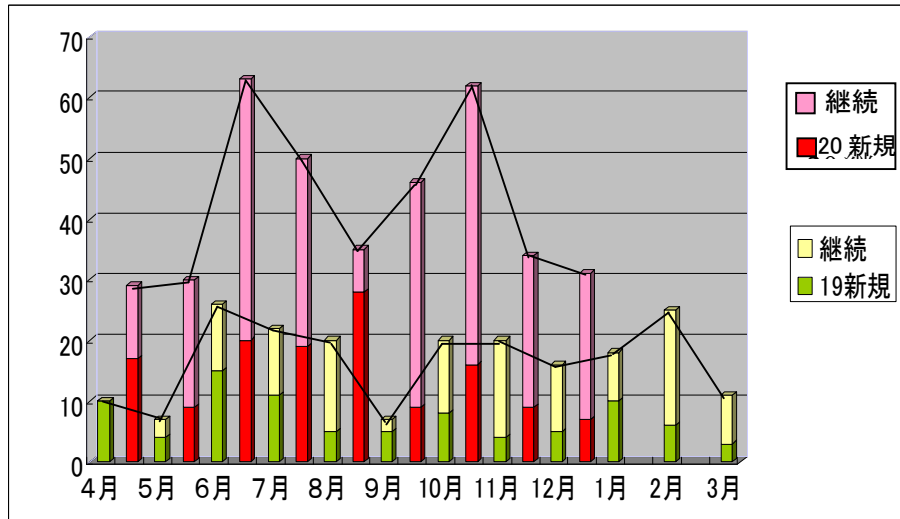
地域支援センター「サポートJOYO」は京都府の「発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業」による地域支援センターとして府内全域を担当している。センター長（副校長）、専任の地域支援コーディネータ（2名）と、各教育部から特別支援教育コーディネータ（5名）で構成、小児科・精神科の学校医や臨床心理士、作業療法士、その他関係機関からの専門家を含め、巡回相談チームを組織している。校内では総括主事を始め、各校務分掌の部長をもって「校内連携会議」を組織し、全校の連携・協力による支援体制を図っている。

これら内外の協力の下、「特別支援連携推進会議」を設置し、本校に関わる地域支援・地域連携のあり方などの協議を進めている。

(3) 相談・支援の実施状況 2年間の活動実績集計から

ア 平成19年度、20年度の比較

(ア) 年度別・月別相談件数

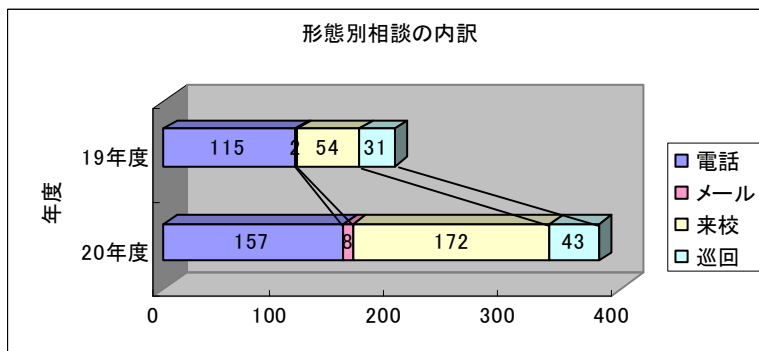


平成20年度12月末までの相談件数は、380件で、そのうち新規は、134件であった。

昨年同期間と比べると、のべ件数は3倍近くにのぼっている。

新規相談は4・6・7・8月に多く、継続相談は6・10月に多い。

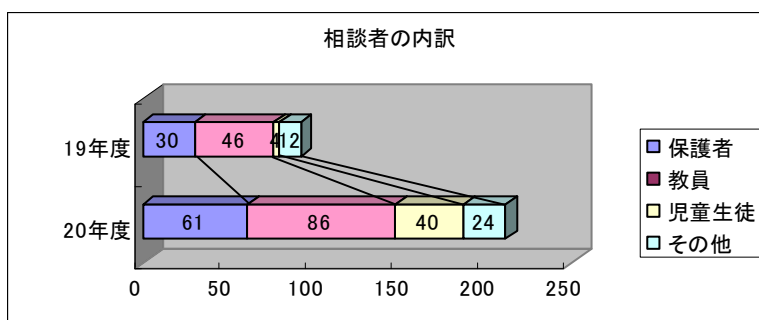
(イ) 形態別相談件数



19年度に比べ20年度では、来校の割合が大幅に増えている。

来校は、教育相談に加えて、学校見学や発達検査なども含んでいる。

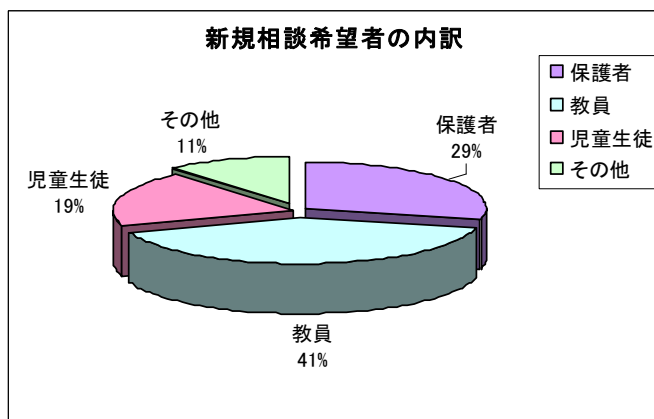
(ウ) 相談者の内訳



20年度も教員からの相談が多いが、保護者からの相談の伸びが大きく、倍増している。

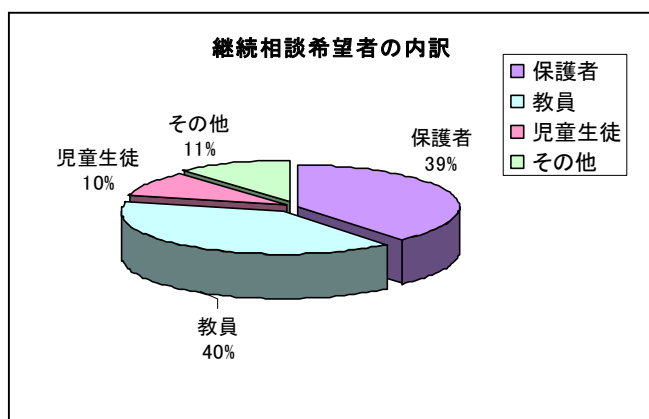
イ 平成 20 年度実施状況

(ア) 新規相談者と継続相談者の内訳



新規相談者の内訳は教員からが 86 件 (41%)、次いで保護者からが 61 件 (29%) であり、児童生徒の 40 件 (19%) は入学相談、学校見学等である。その他は 24 件で、指導主事、医師、適応指導教室指導員、スクールカウンセラー、障害者生活支援センター、地域福祉支援センター、児童相談所、養護施設

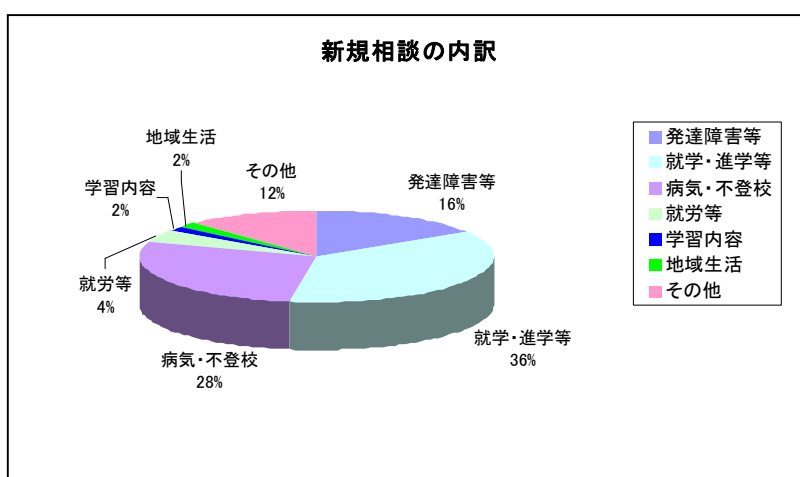
等多岐にわたっている。昨年度と同様に教員からの相談が多くを占めている。



継続相談者も含めると、保護者が多く、継続して相談されるケースがある。

保護者からの不登校に関する相談では 1 ケース 20 数回にも及ぶケースがある。

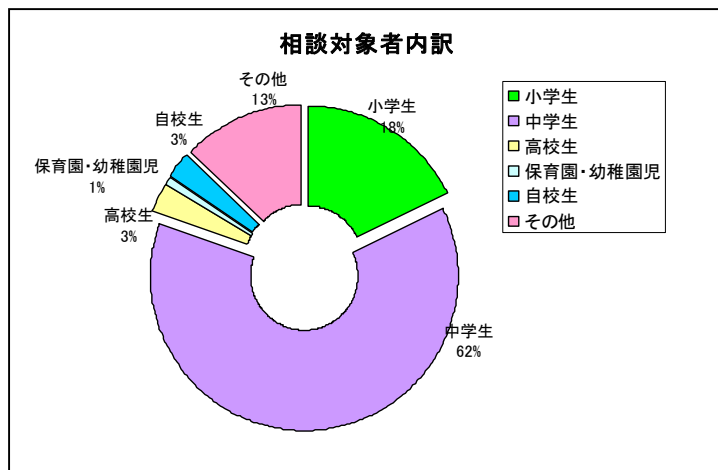
(イ) 主たる新規相談の内容の内訳



新規相談の内訳は就学・進学 63 件 (36%)、次いで病気・不登校 49 件 (28%)、発達障害等 28 件 (16%) であった。就学・進学には入学相談の 30 数件含まれている。(不登校については 25 件の相談があった)

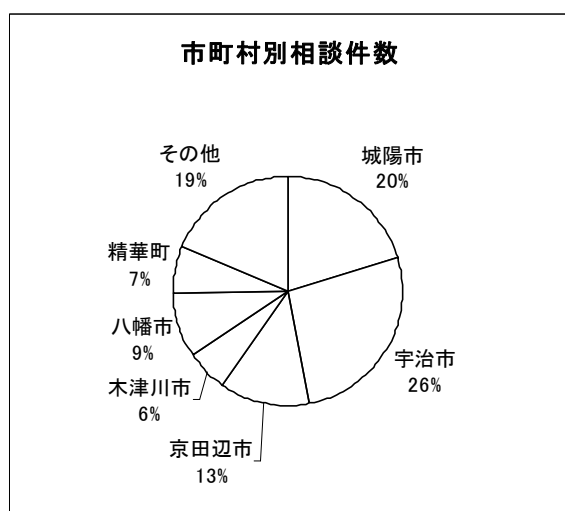
本校の専門性と地域の教育的ニーズとの一致が、昨年度より、さらに明確になっている。また今年度、「その他」には、不適応行動の生徒の対応についての相談が数件含まれている。

(ウ) 相談対象者内訳



相談の対象となる子どもの内訳は、中学生84件(62%)、小学生24件(18%)となっている。

(エ) 市町村別相談件数



市町村別相談では、宇治市27%、城陽市21%、京田辺市13%と山城教育局管内からの相談が多数を占めている。その他の中には管外や京都市、他府県からの相談もあり、広い地域からの相談を受けている。

今年度は城陽・宇治以外に京田辺市、八幡市等の近隣の市町からの相談が増えている。

(4) 本校に寄せられた相談・支援依頼の傾向

これらの集計から本校に寄せられた相談の傾向をまとめると、知的障害・発達障害のある子どもの就学や進路に関わる相談、次いで不登校に関わる相談が多数を占めていることがわかる。

発達障害の子どもの学習や生活への支援に関わる相談も多く、中には集団生活の上で深刻な不適応行動を起こしている生徒の対応についての相談も数件見られた。

病院・医療との連携に関わる相談があること、来校相談が多いこと、中学生を対象とした相談が多数を占めること等も、本校の特徴である。

これらは、本校教育の専門性に対する、地域からのニーズと期待だと受けとめられる。

ほとんどが近隣の市町村からの相談であるが、府内はもちろん、中には他府県等からの相談もあり、広域な地域との連携の上に本センターの役割があることが確認できる。

2 相談・支援の具体的事例

(1) 相談支援

ア 巡回相談、来校相談等の事例

(ア) 発達障害（小学校）「巡回相談員の活用」

対象児童	小学5年（A）
主訴	<ul style="list-style-type: none"> ・パニックの落ち着かせ方や授業態度・教室離脱に対する手だて ・学力保障の手だて ・社会性を育てるための指導及び支援
支援の概要	<p>市指導主事と小学校教頭先生より電話で巡回依頼があり、「サポートJOYO」の巡回相談チームと市巡回相談チームとの合同支援を行った。</p> <p>「サポートJOYO」からはコーディネータと、相談員の作業療法士が参加。</p>
実態	<p>授業中の立ち歩きや教室離脱がある。衝動的に動くことが多く、カッとなると感情が抑えられず暴力をふるうことがある。字が乱暴で算数は苦手意識が強く定着しにくい。理科、特に昆虫が好きで図鑑をよく見ている。物の置き忘れが多い。</p>
巡回相談	<p><児童の様子></p> <ul style="list-style-type: none"> ・担任との信頼関係はできていて、指示は入る。 ・家庭的な課題があり、そのストレスもあり学校でパニックを起こす。 ・自分に注意を引きつけるために、目立つ行動をとる。 ・15分程度、授業に取り組めた。他児のちょっかいから言い合いになる。 <p><分析と支援の仮説></p> <ul style="list-style-type: none"> ・人を見て判断して行動に出るので、心理的安定と、キーパーソンになる存在が必要。心の内を聞き出す対応をする。 ・学習のルール作りとして考えられることは、信頼関係のできている担任をキーパーソンとし、『ストップ』の合図（視覚的に訴えるためにイエローカード）出す。 →その中で、『止まれる自分』『止まれた自分』を自覚させる。 ・クラスの中に、Aが一目を置いている子がいる。 →その子をモデルにする。 ・キレる時には必ず原因があり、学習がわからず、人に知られたくないからではないか。 → 授業の中での工夫を（最初の15分が勝負） ・無意識に体が動いたり、体が動くのは、発達障害というより心理的な要素が強いのではないか。 →心の安定を図るためにしっかり話を聞いてあげる。 ・感覚の鈍感さがあるので自分の行動を振り返り、思い出す経験をさせる。
今後について	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き学校に対して支援を行うこととし、学期末に支援に対する評価を行い巡回相談を継続予定。 ・教育支援計画の策定、個別の指導計画作成についても助言していく。

(イ) 行動面の不適応 (中学校) 「研修協力も含めての支援」

対象生徒	中学2年
主訴	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対人関係のトラブル (粗暴な言動) をなくしたい。 ・ 基礎学力をつけさせたい。 ・ 落ち着いて学習や行事に取り組ませたい。
支援の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校コーディネータからの講師派遣依頼を受け、夏期校内研修会の事例研修に本センター地域支援コーディネータが参加。事前の打ち合わせから、本生徒のアセスメントや具体的な手だてなどについても検討し、研修会での講演や討議に備える。 ・ 同時に、府の専門家チーム会議をうけ、具体的な支援の方向や方策について、担任や学年 担当者、コーディネータとの相談を重ねる。 ・ その後、保護者 (両親) が本校に来校。進路にむけての相談と、通学高等部を見学。3年生へむけて、今後も学校側と連絡を取り合い相談を継続していく。
実態	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習の遅れと行動面の課題が大きい。 ・ 1年時から、勝ち気で攻撃的な言動から友達とのケンカや、教師反抗、問題行動が続いている。授業中も、勝手な行動をして、学習に取り組めていない。 ・ 人との関わりを強く求めている、相手の反応や気持ちにとっても敏感。運動することや、人前に出ることは好き。 ・ 2年時から、担任との約束のもと、徐々に授業に入ったり定期テストに取り組んだりできていた。が、交友関係の広がりも影響し、両親とも衝突、生活の乱れが激しくなる。 ・ 医師の診断によれば、ADHDとは言い切れないが、同様の対応が有効。LDの疑い (視覚認知能力の弱さから) もあるとのこと。
相談・支援の内容	<p><校内研修会の中で></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研修の目的として「全校的な配慮を要する生徒について、発達の課題や生育歴・家庭環境等の影響等を捉え直し、適切な支援への手だてを探ること」 <p>「担任や学年だけでなく全校体制で 共通理解のもとに一致した指導支援を進めること」をあげ、全校の先生方からの発言を求め、こちらからも助言を行いながら、討議を深めた。加えて、本生徒の実態や課題を捉え支援を進める視点として、「応用行動分析的な支援の方向」について講演した。</p> <p><担任やコーディネータとの相談を通して></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 担任の指導 (本人を受け止めつつ、メリハリのある指導。本人にとって見通しのもてる約束をして、達成できたことをほめる。学級集団の理解を図り、活躍の場を作る。) ・ 学年・全校での取組 (本人の行動記録をとって分析し、有効な指導方法や手だてを探る本人や保護者への関わりでの役割分担をする。医療や関係機関との連携を進める。) ・ 学習 (LD的な傾向に対する具体的な手だてや進路に対する目標の持たせ方を探る。) <p><保護者へのアドバイス></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 両親の思いを受け止めつつ、父母の本人への指導や進路への考え方の相違を調整。父母で役割分担をしながら、家庭としての支えを継続すること。
今後について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 引き続き学校に対して支援を行うこととし、その中で、保護者に対しても相談支援を考えていく。さらに医療との連携、進路にむけての相談も進めていく。 ・ まずは、家庭と学校が本人にとって「よりどころ」であることを大切にすることを確認。

(ウ) 不登校 母への相談支援

対象生徒	中学1年
主訴	不登校に対する手だてと家族の関わりについて
実態	小5から本人が私学受験を希望し、塾通いを始める。6年1学期の終わり頃から「学校に行くのがしんどい」と言い始め、学校に行きにくくなった。12月「何で受験するのかわからなくなった。」と言い不登校になる。希望校ではなかったが私立中学に合格。4、5月は楽しく登校できたが、自信があったはずの中間テストの成績が悪く、そのことがきっかけで6月頃から朝起きられなくなり不登校になる。病院を受診し『起立性調整障害』と診断を受ける。母は本人の気持ちに寄り添いたいのが父・祖母に理解してもらえず、うまく調整できない。との訴え。
支援の経過	元幼稚園園長からの紹介で相談開始。電話相談から始め、週1回の定期来校相談で継続中。
支援の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・少しでも安らげる家庭へ →祖母も一緒に来校され 協力してもらおうよう依頼。祖母から父への働きかけをされた。 ・ゆっくり休む期間を設ける →寝起きが良くなり、父とも穏やかにしゃべれるときも出てきた。 夏休み前に数日登校できる。 <母へのアドバイス> ・不理解な家族への働きかけや接し方 ・母の本児への接し方や気持ちの持ち方 ・本児の状態や現状に対しての捉え方 →1週間の様子を聞く中で、母の本児への接し方を振り返り、ほめるようにした。
本児の経過	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期は、2週間に1日程度のペースで登校。 ・3学期、全部ではないが1週間遅れで冬休みの宿題をやり終え、クラスの友達と待ち合わせをして週2、3日登校できるようになった。

イ その他の相談支援（中学校別室担当教師からの相談・適応指導教室からの継続巡回依頼等）

不登校傾向のケースについては、中学校の教育相談担当教師や、適応指導教室からの相談依頼もいくつかあった。巡回相談を実施して、教室での本人の様子の観察や発達検査の実施、保護者との面談、さらに「サポートJOYO」巡回相談員である医師や作業療法士の協力を得て、本人のアセスメントや具体的な支援の手だての検討を重ねた。

進路・就労にむけての相談としては、通学高等部・病弱教育部を中心に、来校相談を数多く実施した。本校への入学・転入に関わる相談だけではなく、発達障害や不登校、学習の遅れ、様々な心理的課題等をかかえた子ども達（小学生から中学生、高校生等）の進路に関わる相談がほとんどであり、進路選択の難しさとともに、本校の地域支援の機能の充実がますます必要であると感じている。

その他、高校からも障害のある生徒の就職についての相談があった。また、家庭生活への支援が必要なケースで、地域の生活支援センターや児童相談所と連携したものも多い。

(2) 研修支援

ア 研修会の開催

(ア) 「特別支援教育研修会」

H19年度の「特別支援学校・地域等連携推進事業」として、地域支援の視点から「特別支援教育研修会」を年一回企画・実施した。教育関係機関やその他関連諸機関（医療、福祉、保健、労働、行政）の関係者を対象とし、より多くの参加者を受け入れられるよう「文化パーク城陽」を会場とした。

平成19年度特別支援教育研修会

テーマ：「特別支援教育にかかわる課題をさぐって」

～最近の児童生徒の様子から見えてくるもの～

日時：平成19年8月3日（金） 13:00～16:00

地域の教育関係者を中心に、201名の参加者を迎えての研修会となった。前半は3教育部の専門性をテーマにした実践報告を行った。各教育部における子ども1人1人に応じた支援の様子を紹介し、参加者の本校に対する知識や理解を深めることができた。後半はテーマに沿ったパネルディスカッションを行った。コーディネータとして本校校医で精神科医の有賀やよい氏、アドバイザーとして同じく校医で小児科医の徳永修氏を迎えて、医療と学校との連携についての話を交えながら進めた。参加者からの発言を求めることにより、発達障害や福祉との関わりといったより現場に応じた内容にも触れることができ、幅広い分野に迫る研修会となった。

平成20年度特別支援教育研修会

テーマ：「地域で出会った気がかりな子どもたち」

～心理的課題や発達障害のある子どもへの豊かな関わり～

日時：平成20年7月25日（金） 13:15～16:30

前年度を上回る279名の参加者があり、地域の関係者の特別支援教育への関心の高さと本校へのニーズの高さを認識する研修会となった。洛西愛育園園長高木恵子氏による基調講演のもとに、パネルディスカッションを行った。パネラーとして本校校医有賀やよい氏や相楽地域障害者生活支援センター長傍島規子氏、城陽市立城陽中学校特別支援教育コーディネータ衣川一成氏など各方面からコメンテーターを迎えたことで、幅広い内容のディスカッションを行えた。それぞれの専門性や実践に関わる話や、それらに関する会場の参加者からの発言も交えながら研修を深めることができた。



【今後に向けて】

2年続けて開催してきたが、参加者数の増加や活発な発言等から本校の研修会に対する地域からの期待の高さを認識するものとなった。期待に応えるためにも、今後も地域のニーズに応じたテーマを設定して企画する。構成としてはこれまでと同様に地域の質問や要望を積極的に取り入れるというスタイルを大事にして、より地域の実態に応じた研修会となるように発展させていく。

(イ) 「事例支援研修会」

テーマ 「不登校の子どもや保護者によりそった支援」
日時 平成 20 年 11 月 14 日 (金) 15:40~17:15

講師に、本校地域支援センター「サポート JOYO」巡回相談員として御協力いただいている臨床心理士 今野芳子氏を迎え、「事例支援研修会」を開催した。当日は平日の放課後にもかかわらず、地域の小中学校、適応指導教室等から多数の参加があった。

本校病弱教育部の実践発表をもとに、日々不登校傾向にある児童生徒の指導・支援にあたっておられる先生方と、それぞれの実践や課題等を交流し合い、「子どもや保護者によりそった支援のあり方」を深めることができた。

最後に、講師の今野芳子氏からご指導ご助言をいただき、「不登校の背景にある課題をとらえるための視点」や、「子どもや保護者の姿や思いの中にこそ、支援のヒントがある」ということを、改めて確認することができた。



(ウ) 参加者の感想から

- ・高木先生の話は楽しく、また感動するものであった。私が自分のやる気を工夫していくことで、少しずつでも子供達が過ごしやすくなってくれるよう2学期からがんばろうと思った。パワーをもらった。
 - ・パネルディスカッションでは事例に対して 先生方の返答が具体的で分かりやすかった。具体的に実践できるものもあり役立った。実例をもっとあげて欲しい。
 - ・乳児期から成人、就学までの人の人生として長いサポート、支援の大切さ、課題を勉強で きてよかった。
 - ・有賀先生の熱く語ってくださった内容は、分かりやすく参考になりました。もっとお話を聞きたかったです。
- 【平成 20 年度 特別支援教育研修会】

- ・不登校児や保護者への関わりのヒントが学べました。長引いている不登校児の状況ですが、本人の思いを聞くことが大切だと感じました。
 - ・事例でまとめられている支援等は教室でも実践していることと似通った内容であり、明日から実践しようという内容でもありました。
 - ・原因や課題をしっかりとつかむことの大切さと、少しずつ解きほぐしていく地道な作業の大切さを教えていただきました。
 - ・今野先生の助言は明瞭で分かりやすく、大変参考になりました。お話が聞けてよかったです。
- 【平成 20 年度 事例支援研修会】

本校地域支援センター「サポート JOYO」では、今後も地域からのご意見やご要望にそって、このような事例を基に、より身近なテーマでの研修会を開催したいと考えている。

イ 講師派遣、研修協力

「サポート JOYO」では、地域からの要請に基づいて、特別支援教育に関する校内研修を支援するために、講師派遣等の研修協力を行っている。その中から、地域の小・中学校の校内研修の具体例を紹介する。

(ア) 小学校における校内研修の内容

タイトル	「気になる子どもの指導について」～社会的スキル学習～
概要	頻繁に手洗いをする高機能自閉症生徒に対して、アセスメントを行い、複数のアプローチを行い、問題となる行動を解消し、社会的スキルを身につける指導を続けることで、当初困難が予想された職場実習に参加できた事例の紹介をした。
具体的な内容	<p><主訴></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 気になることがあると5分以上手を洗わなければ気がすまず、しばしば授業中にも手を洗いに行く。 ・ 雑巾がけをいやがり、掃除の活動自体も回避的である。 ・ 薬品や体に悪いと本人が思う物には触ることを拒否する。 <p><アセスメント結果> ～本人への聴き取り、教師の観察に基づくアセスメント～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大きなストレスがあった後、長時間手を洗っていることが多い。→ 気分の切り替え ・ 難しい課題、嫌な課題等の時にその場を離れて手を洗うことが多い。→ 課題回避 ・ 雑巾の汚れ（バイ菌）が気になり、触れないと同時に、そのような活動もやりたくないと思っているようだ。→ 誤信念による過大な不安 <p><分析></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ストレスが高いほど、手のバイ菌を「感じる」度合いが大きい。 ・ 手を洗うことで結果的に難しい課題、嫌な課題から逃げられる。 ・ 必要以上に石けんをつけるので、ぬるぬる感が長く残り、嫌なようである。 ・ 間違った理解に基づいて、過大な健康不安を感じているが、嫌な課題を避ける結果にもなっている。 <p><指導仮説・方略></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 場面ごとの様々なストレスの軽減を行う。(指導環境、授業内容、指示の方法等の検討と改善) (2) 本人が理解できる説明や将来を見通した約束によって、困った習慣をリセットする。 (3) 不安やストレスの克服法を提示し、スモールステップで解消するトレーニングを行う。 <p><結果></p> <p>3つの方略を並行して実施した結果、徐々に手洗いは軽減され、2週間程度でほぼ問題のないレベルになった。また、効果のあった方略を利用して機械油で汚れた自動車部品工場での職場実習ができた。</p>
研修の感想より	似たような事例は、受容的態度だけでは改善されなかったが、複数のアプローチを組み合わせることで効果があがることがわかった。アセスメントの重要性がわかった。

(イ) 中学校における校内研修の内容

タイトル	応用行動分析を利用したアセスメントと指導
概要	中学校より場面緘黙との引き継ぎを受けた生徒に関して、対人関係や生育歴等を中心にアセスメントを行い、卒業後の進路を見通した指導を行った経緯を紹介した。
具体的な内容	<p><主訴></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 兄や特別支援学級担任とは話ができるが、それ以外の場面では、「うなづく」「首を振る」等の返事がほとんどである。 ・ 登下校では走る場面があるのに、それ以外の場面では動作が緩慢で、体育の50m走や持久走では歩く程度の速度しか出せない。 <p><アセスメント結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 表情は豊かで、指導者相手におどけるような表情をしたり、教師のダジャレに吹き出すことがある。 <ul style="list-style-type: none"> → コミュニケーションができないわけではない。 ・ 指導者の指示に対して、わざと逆のことをしたり、自己流のやり方を通そうとする。 <ul style="list-style-type: none"> → 言葉以外の自己主張はしている。 ・ 声は小さいが、号令や自己紹介などの定型の言葉、紙に書いたセリフは話すことができる。 <ul style="list-style-type: none"> → 全く言葉を発しないわけではない。 <p><分析></p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・ WISC-Ⅲによる分析では、群指数の「言語理解」が、他のどれよりも低い。 →簡単な言語反応は得意だが、複雑な言語概念化が苦手 ・ 中学校の担任からの引き継ぎで、幼少期家庭での体罰と放任があったことがわかる。 →生育歴での対人関係、言語環境の問題、自己肯定感の低さ ・ 日常の行動パターンを観察した結果、本人にとり無言であることが利益になる様々な場面がみられた。 ・ 相手を困らせるためととれる状況での無言もみられた。 <p><指導仮説・方略></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 文字等、理解できる方法で説明し、伝わったことを確認する。(コミュニケーション環境の検討) ・ 日常の声かけを意識し、放課後に好きな活動をする。(好ましい対人関係の構築、自己肯定感の向上) ・ マイルールで通用していたことを検討し、誤学習、無学習を計画的に修正する。(規範意識の学習) <p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ タイマーや記録表を見て振り返ることで、短距離や持久走で「歩く」と「走る」の違いがわかり、好タイムを出すことができた。 ・ 以前は指導者の指示の意味がわからないようで、夏服、冬服の切り替えができなかったが、衣替えの意味の説明と事前の告知で、次の年度には改善された。 ・ あいさつや報告の練習を繰り返し、必要な場面で最低限のあいさつや報告ができるようになった。
<p>研修の感想より</p>	<p>本人の特性や、生育歴だけが原因でなく、その特性に対して周囲が反応した結果、意識しないうちに、無言でいることが楽な状況を作ってしまうメカニズムがわかった。</p>

(3) 他機関との連携

地域への相談・支援活動において、隣接する南京都病院や院内療育指導室との日常的な連携はもとより、児童相談所や家庭児童相談室、種々の障害者生活支援センターや障害者就業・生活支援センター、労働機関等との連携協力を得ている。さらには、医師や臨床心理士、作業療法士等の参画の上で、本校主催の「特別支援連携推進会議」を開催し、本センターの巡回相談チームとしても、巡回相談や研修支援に協力を得ている。

同時に、近隣の教育局や市町村教育委員会の理解協力を得て、支援・相談活動を進めており、一部では教育委員会主催のコーディネータ会議への出席や研修会への講師派遣、合同の巡回相談等を実施している。また、以前から近隣市町の特別支援教育研究会に行事の取組を中心に参加し、その中で、地域の学校関係者や障害のある子どもを持つ保護者等とも交流を持ち、本校への理解も広がってきた。今後さらに、積極的に研究や研修への協力を進め、連携を継続していきたい。

近年、教育機関だけでなく、福祉や保健、労働などの関係機関が連携して、地域の中で障害児(者)の支援にかかわる広域な支援ネットワークが構築されようとしている。

本校も地域のセンター的役割を担う立場を踏まえ、地域支援の取組や日々の教育活動の基、すでに以下のようなネットワークに参画しており、今後も連携・協力を深めていきたいと考えている。

「山城北圏域発達障害者支援地域連絡協議会」 「山城北圏域障害者自立支援協議会」

「南部就労支援ネットワーク会議」 「京田辺市地域自立支援協議会」等

こういった関係機関や協議会等との連携を継続しながら、本校の役割を明確にして、障害児(者)の生涯にわたる支援の広域なネットワークの構築を推進していきたい。

(4) 情報発信

ア ホームページ

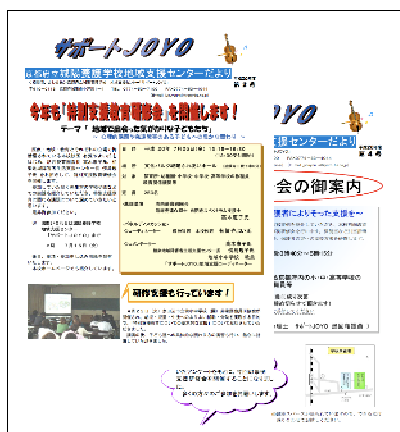
「サポート JOYO」の活動をより広く知ってもらうために、インターネットのホームページで情報を発信している。ホームページでは、地域支援の概要や相談方法、活動の実績紹介など様々な情報にアクセスできるようになっている。

なお、「サポート JOYO」のホームページは、本校ホームページのトップよりリンクされている。
京都府立城陽養護学校 <http://www.kyoto-be.ne.jp/jyouyou-s/>



イ 「サポート JOYO だより」、パンフレット

「サポート JOYO」は、「サポート JOYO だより」やパンフレットでも知らせている。これらの資料は、担当者が関係先に配布すると共に、ホームページからもダウンロードできるようにしている。



サポート JOYO だより



パンフレット

ウ 重心教育部紹介ビデオ（重心教育部の実践）

（ア）ビデオ作成に至る経過

昨年度の公開研修会で重心教育部についてビデオを交えた紹介をしたところ、反響が大きく、地域に重心児がいて医療に支えられながら生活し教育を受けていることをもっと発信していくべきと考えた。保護者の承諾を得て今年度は、「重心教育部紹介ビデオ」を作成した。

（イ）ビデオの活用

介護等体験や新採研や10年目研修としての他校種体験、地域子供会の保護者学習会等で活用し、理解を深めてもらうことができた。また、校内他教育部との交流や地域の小学校との交流及び共同学習の中でも活用することができ、交流の内容をより豊かにすることができた。



（ウ）他の校務部との連携

次に交流担当との連携で、青谷小学校との交流を深めた事例について報告する。

月 日	会 議	主な内容
5月15日	校内打ち合わせ	・今後の交流及び共同学習の在り方についての事前打ち合わせ
6月10日	両校指導者打ち合わせ（事前）	・今年度の交流及び共同学習について ・事前学習の提案と当日の内容について ・日程調整
6月20日	事前学習（青谷小5年児童対象）	・城陽養護学校交流担当者による重心教育部の子どもたちの紹介（地域支援部作成ビデオ使用） ・質問及び感想発表
6月27日	交流及び共同学習当日	・歌と合奏鑑賞（青谷小学校から） ・みんなで回せ！夢風船（城陽養護学校から）
7月15日	校内担当者会議	・交流教育担当者と地域支援部担当者（共に重心）による反省と、今後の交流及び共同学習の展望
9月1日	両校指導者打ち合わせ（事後）	・交流及び共同学習のまとめ（来年度に向けて）

本校交流担当者が中心になって、表のような流れで、交流を進めた。地域の方でも重心教育部のことはあまり知っておられないので、事前打ち合わせの際には、先生方にもビデオを見てもらった。実態を知って交流のイメージを持ってもらうことができ、事前アンケートや事後の感想など大変協力的に取り組ん

でもらうことができた。5年生の児童にも、事前学習で、一部ではあるがビデオを見てもらった。初めて目にする重心教育部の子どもたちの実態に、目をそらしてしまう

児童もいた。しかし、交流当日までの1週間の中に、グループ分けをしたり準備をしたりする中で目的意識を持つことができたようだった。5年生全員が車椅子を押したり、手をつなぐなど重心教育部の子どもたちと直接関わりを持つようなゲームでは、進んで車椅子を押そうとしたり、質問したり、これまでの交流ではあまり見られなかった姿が数多く見られた。また、重心教育部の子どもたちにとっても、同世代の子どもたちとふれあう機会があまり無い中、貴重な経験となり、笑顔やうれしそうな表情で受け止めることができていた。事後の両校まとめの会議でも、それらの成果や交流の意義、今後も継続した取組としていくことなどを確認することができた。



（エ）まとめ

このように、紹介ビデオを活用することで、さまざまな機会に重心教育部の教育について情報発信することができた。地域支援の取組としてこのビデオの作成を始めたのだが、この取組を通じて教務部や交流担当等の他の校務部と連携することができた。今後は教育部全体で取り組み、情報発信の機会や活用の場をさらに広げていきたい。

3 今後の方向性～広域な地域と連携した「サポートJOYO」へ～

(1) 2年間の成果と課題

<成果>

- ・全校の理解と3教育部の連携を基とした「サポートJOYO」の組織体制を整備し、地域支援センターとしてのシステムの構築を図ることができた。
 - 地域支援コーディネータの増員（1名から2名へ）と専任化、校内体制の確立
 - 外部専門家を含む巡回相談チームの設置と、「特別支援連携推進会議」の開催
 - 「校内連携会議」の設置など、他の校務部との連携協力の推進
- ・本校の教育についての理解が広まり、本センターへのニーズの高まりに応じて、数多くの支援・相談活動を実施することができた。
 - 巡回相談チームを活用した、様々な支援・相談活動の実施
 - 地域からのニーズに応じた外部参加研修会の開催と、多方面への講師派遣 等
- ・地域の様々な学校や関係機関との連携・協力を具体的に深め、広げることができた。
 - 支援・相談活動に関わる連携・協力の促進と広域な支援ネットワークへの参画
- ・府内全域にむけて、情報発信・提供を行うことができた。
 - パンフレットや「便り」の配布、ホームページの刷新
- ・在校生への日常の支援・相談や、進路相談、就労生活支援等を組織的に進めることができた。
- ・地域支援や教育相談にむけての専門性の向上にむけて積極的に研修を進めることができた。

<課題>

- ・日常の教育実践を生かした情報発信・提供を具体化する。
- ・各種関係機関・地域特支研・支援ネットワーク等との継続的な連携を構築する。
- ・支援・相談の実施状況や内容に対する教職員の共通理解と、人材の育成を積極的に図る。

(2) 今後の具体的な方向性「サポートJOYO」のさらなる充実を目指して!

① 3教育部の教育実践と専門性を生かした相談支援の充実

- ・医療との連携の継続と充実 ・病気や肥満、不登校に関わる相談支援
- ・進路・就労についての相談支援（知的障害や発達障害等）
- ・重度心身障害児の教育や生活についての相談支援
- ・公開研修会の開催等の積極的な研修支援の継続

② 専門性を生かし、ニーズに応える教育相談の実施

- ・巡回相談チームや校内外の人材の活用 『相談の輪の広がり』
- ・具体的な支援や手立てにむけての 継続的な相談 『相談の質の深まり』

③ 府内全域への情報発信・情報提供

- ・日常の実践と、地域からのニーズとのつながりを捉えた、情報提供
- ・研修会やホームページなどでの実践や研究の発表・紹介

④ 在校生（卒業生）に対する教育相談や支援活動の充実

- ・入学相談、転出・入相談、進路相談、就労支援などを含む

⑤ 広域な支援システム（地域ネットワーク）への参画と継続的な連携

- ・保健・福祉・労働等の機関との地域ネットワークや、地域特支研等への継続的な参加